*Journey to Topaz*と*Weedflower*
―ヨシコ・ウチダとシンシア・カドハタの比較研究―

佐　藤　清　人
（人文社会科学部）

はじめに

日系アメリカ人三世の小説家Cynthia Kadohataは作家として活動をはじめた初期においては、日系アメリカ人を主要な登場人物として、現代のアメリカ社会に生きる彼らの日常的な生活や人間関係を描く物語を創作した。しかしながら、2005年に出版した*Kira-Kira*という小説は少女を主人公とする児童文学であった。また、翌年の2006年に公にした*Weedflower*では、Kadohataは再び少女を主人公とする青少年向けの物語を書いたが、その時代背景は太平洋戦争であり、また、そのテーマは日系アメリカ人に強制された収容所の生活とそこで暮らす少女の成長であった。

日系アメリカ人三世の作家はほとんどが戦後生まれであり、彼らは太平洋戦争や強制収容を経験してはいない。しかしながら、彼らはその著作のなかで自分たちの両親や祖父母が経験した強制収容についてしばしば言及し、それをテーマとする作品を書いている。作家として活動を始めた初期においてこそ、Kadohataは強制収容のテーマに触れることはなく、むしろ避けているように見えたが、*Weedflower*では他の作家と同じように、強制収容のテーマを取り上げることになった。強制収容のテーマは、日系アメリカ人の作家にとって通り抜けなければならない通過儀礼のようなものなのである。

ところで、Kadohataの*Weedflower*は一般の小説というよりは児童文学の系列に属する作品であり、日系アメリカ文学の児童文学の分野では、Yoshiko Uchidaがよく知られている。Uchidaは日系アメリカ人二世の作家であり、自伝から小説まで幅広いジャンルで活躍し、とりわけ児童文学のジャンルで数多くの作品を残した。しかも*Journey to Topaz*（1971、以下*Topaz*と略）という作品では、十代に達して間もない少女を主人公として日系アメリカ人が強制収容を強いられた様子を描いており、彼女の年齢はKadohataの主人公とほぼ同じである。KadohataがUchidaの作品を知らなかったとは思われないが、逆に、大きな影響を受けたとも思われない。主人公の年齢を除けば、２つの物語はさほど似てはいないからである。KadohataはむしろUchidaとは異なる物語を書こうとしたように思われる。

では、Kdohataが書こうとした新たな強制収容物語とはどのような物語であろうか。Kadohataの物語を理解するためには、児童文学という同じ形式で書かれ、しかもほぼ同じ年

齢の少女を主人公としたUchidaの*Topaz*との比較が有効であろう。また、その比較はUchidaの*Topaz*にも逆照射し、その作品の特徴を理解するのに役立つであろう。小論ではまず、Uchidaの作品が示す特徴を明らかにし、次に、それを踏まえて*Weedflower*の本質を探ってみたい。さらに両者を比較し、強制収容を体験した日系アメリカ人二世の描く強制収容物語とそうした体験を持たない三世の強制収容物語との間に、どのような違いがあるのか突き止めてみたいと思う。

Journey to Topaz

Yoshiko Uchidaは日系アメリカ人二世の作家のなかで最も多産な作家である。Uchidaは小説、自伝、児童文学さらに日本の昔話など幅広いジャンルで著作活動を行った。一方、作品のテーマに関して言えば、Uchidaが最もこだわったテーマは太平洋戦争における日系アメリカ人の強制収容である。Uchidaの唯一の本格的な小説*Picture Bride*（1987、以下*Bride*と略）は作品のタイトルからも分かるように、その主要なテーマは、日系人がアメリカへ移民を始めた初期の時代に流行した「写真花嫁」である。写真を交換するだけの簡略な手続きで結婚した結果、悲劇的な人生を送らねばならなかった多数の写真花嫁の運命をHanaという主人公に託して描いた物語が*Bride*という小説である。しかしながら、この小説では、物語の後半になると、時代は太平洋戦争の時代へと進み、強制収容所での日系アメリカ人の生活が描かれ、作品のテーマは写真花嫁から強制収容へと移行する。すなわち、強制収容もまた*Bride*の主要なテーマの一つなのであった。

一方、Uchidaの*Desert Exile*（1982、以下*Exile*と略）は、彼女の前半生を描く自伝である。作品の前半では両親に関する事柄やUchidaの幼少期が描かれているが、*Bride*と同じように、後半になると強制収容の時代に移り、収容所における日系アメリカ人の生活や行動が詳細に記述されている。ここでもやはりUchidaの主要な関心が、自分や家族の個人的な出来事よりも、むしろ強制収容というほとんどすべての日系アメリカ人が共有した体験の方に傾いていたことは明らかである。

さらにUchidaの児童文学に目を転じてみよう。児童文学はUchidaが最も情熱を注いで執筆活動を行った分野であり、Rinkoという少女を主人公とする物語はシリーズ化され、Uchidaの児童文学の中核を形成している。Rinkoシリーズの物語は日系アメリカ人の少女を主人公とし、その成長を描いた教養小説的な物語である。時代背景が太平洋戦争前の時代であるため、強制収容への言及はない。一方、*Topaz*はRinkoシリーズよりも前に書かれた作品だが、Uchidaはそこですでに児童文学の分野でもいち早く強制収容のテーマを取り上げていた。しかも*Topaz*は、作家としてのUchidaの生涯において、強制収容を取り上げた最初の作

品であった。このように、Uchidaは強制収容という同一のテーマを児童文学、自伝、小説という異なった文学形式で描くという、極めて稀な試みをしている。*Exile*や*Bride*への言及を交えながら、以下に*Topaz*の特徴を明らかにしていきたいと思う。

ところで、*Topaz*と*Weedflower*の比較研究はこれまでなかったわけではない。すでに末木によってなされた研究がある。末木はその論文のなかで、*Topaz*について次のように述べている。「『トパーズへの旅』（…）には収容政策への批判はみられるものの、「白人」やアメリカ社会への嫌悪はみられない。」（末木2015、224）末木が指摘するように、太平洋戦争中に日系アメリカ人を強制的に収容したアメリカ政府の政策に関しては、どの作品でもUchidaは終始一貫して批判を加えている。しかし、それは常に限定的であり、そうしたUchidaの姿勢は、*Topaz*の次のような一節に集約されている。

> Mr. Kurihara had said America was making prisoners of its own citizens, inspecting them, searching them, and herding them like cattle from one camp to another.
>
> But she remembered too what Mother had said back to him. "Fear has made this country do something she will one day regret, Mr. Kurihara, but we cannot let this terrible mistake poison our hearts." (*Topaz*, 90)

主人公のYukiが収容所に入ってから友達になったEmiの祖父であるMr. Kuriharaは、強制収容の不当さを糾弾している。一方、Yukiの母は、アメリカ政府を日系アメリカ人の強制収容に駆り立てたのは「恐怖」であり、いつかアメリカ政府はそれを後悔するであろうと述べ、アメリカ政府を擁護している。

強制収容それ自体をUchidaは決して正当化してはいない。事実、*Topaz*のなかには、強制収容について書かれた他の書物と同様に、太平洋戦争勃発後すぐに始まるFBIの家宅捜査、立ち退きを命ぜられて慌ただしく財産を処分する様子、競馬場の厩舎から急遽作り変えられたばかりのタンフォランの仮転住所での生活、さらに砂嵐が頻繁に起きるトパーズでの収容生活など、10万人を越える日系アメリカ人のほとんどすべての人々が一様に舐めねばならなかった苦汁に満ちた生活が記述されているのである。

しかしながら、どういうわけか、*Topaz*が読者に与える印象は必ずしも悲惨な収容生活というわけではない。それはなぜであろうか。Uchidaは*Topaz*のPrologueで

> *Journey to Topaz* is the story of what happened to one Japanese American family during this wartime tragedy, then called "the evacuation." Although the characters are fictional, the events are based on actual fact, and most of what happened to the Sakane

family also happened to my own."(*Topaz,* viii)

と述べている。Yukiの一家Sakane家の人々の身に起きたことのほとんどがUchida自身の家族に起こったことであるという言葉は概ね正しいと思われる。全米10箇所に設けられた収容所に同時期に収容された日系アメリカ人はほぼ同じような体験をしており、それは複数の作家による自伝を読み比べれば容易にわかることである。Uchida自身述べているように、*Topaz*の登場人物は実在の人物の名称を変えたり、まったく架空の人物を加えたりしているが、出来事は事実から大きく逸脱してはいないものと思われる。

ならば、逆に*Topaz*と自伝である*Exile*との間で最も著しく異なる点は何であろうか。相違点の一つは語りの手法である。*Exile*ではUchida自身が自らの経験を語り、さまざまな出来事に関して説明を加えている。したがって、それは経験談であり、物語性は希薄である。一方*Topaz*は、三人称の語り手がYukiとその一家の物語を語っていく。また、若い読者を想定しているためか、出来事に関する説明的な記述は極力省かれ、簡略化されている。若い、あるいは年少の読者を意識したと思われるもうひとつの要素としては、子供が喜ぶお菓子への言及が極めて多いことである。*Exile*では１度しか言及されなかったお菓子への言及が、*Topaz*では数え切れないほど至るところに出てくるのである。こうした食べ物が容易に手に入る収容所の生活は、それほど過酷なものではなかったような印象を読者には与えるのである。

しかしながら、*Exile*と*Topaz*の間には相違点よりも共通点が多く見受けられる。Yukiの家族は両親と兄であるのに対して、Uchidaの家族は両親と姉である。UchidaのYukiの父と同じように日系の大企業に勤めており、太平洋戦争が勃発した直後には、日系人社会で指導的な立場にあることからFBIの家宅捜査を受け、その後、連行されている。さらに、時期は異なるが、どちらの父親もその後保釈されて家族のもとへと帰ってくる。末木はUchidaの家族が「日系人の中では恵まれた環境におかれていたこと」（末木2015、225）をUchidaの批判の弱さの原因とみなしている。Uchidaの両親はともに同志社大学の出身で、英語が堪能であり、経済的にも比較的に裕福であった。彼らの周りにいるアメリカ人（白人）も彼らに対して好意的な態度を示す人々が多く、そもそも彼らはアメリカ社会に対して大きな不満を抱いていなかったように思われる。

とはいえ、Uchidaが人種の問題についてまったく無関心であったというわけではない。*Topaz*のなかには、Yukiがあからさまに人種差別を受ける次のような場面がある。

She thought now about red-haired Garvis who sat opposite her at school. The day after the Pearl Harbor attack he had leaned over and hissed, "You dirty Jap!"

> Yuki was so angry she had shrieked back, "I am not! I'm not. I'm an American!" And she didn't care who heard her.
>
> Miss Holt had stopped writing on the blackboard and had stated then and there to the entire class that the Japanese born in America, the Nisei, were just as American as anyone else in the school. ...
>
> I hate you, Garvis Dickerson, she thought bitterly. It was a good thing there were people like Mimi Nelson and Mrs. Jamieson to make up for the Garvises of the world. Mrs. Jamieson lived all alone and had a bad leg that gave her pain and heartache, but Yuki had never heard her say a cross or unkind word to anyone. (*Topaz*, 20-22)

同級生のGarvisはYukiを蔑み、罵る不愉快な同級生だが、友人のMimi Nelsonや近隣に住む未亡人のMrs. JamiesonはYukiにはとても親切にしてくれる。Mimiの家族はYukiの一家が仮転住所に旅立つ前の日に彼らを夕食に招く。また、MimiとMrs. JamiesonはYukiたちが収容所に移住した後も、彼らのためにお菓子を送ってくれたり、また、直接収容所まで会いに来てくれる。*Topaz*の物語では、Garvisのような人種差別主義者よりもMimiやMrs. Jamiesonのような平等主義者の存在がむしろ強調されているのである。

これまで見てきたように、*Topaz*においてUchidaのアメリカ政府とアメリカ人に対する態度、姿勢は時折り否定的な側面を見せはするものの、全体的には肯定的である。年少の読者（しかもそれはアメリカ人、とりわけ白人の読者であったはずである）向けに書いた*Topaz*において、Uchidaはアメリカの一部である自分たち日系アメリカ人の苦難を描き出すことと同時に、人種の垣根を超えて存在するアメリカという国とアメリカの人々に対する信頼を主張することを目的としていたように思われる。

ところで、日系アメリカ人の強制収容に関して、日系アメリカ人を強制的に収容所に移住させたことが深刻かつ重要な出来事であったことは言うまでもないが、それに伴うもう一つの重要な出来事があった。それは強制収容が始まってから約１年後に行われた忠誠登録のアンケート調査である。日系アメリカ人の歴史のなかではあまりにも有名な事柄であり、詳細を語ることは紙数を無駄に費やすことになろうが、便宜上、その要点だけをかいつまんで紹介しておこう。

そもそも大統領令9066号によって太平洋沿岸地域に住む日系アメリカ人を内陸部に設置された収容所に転住させることになった理由は、日系アメリカ人が祖国日本に加担し、アメリカ政府に危害を与えるようなスパイ活動を阻止することであった。しかし、強制収容が始まって約１年が経過しても、そうしたスパイ活動が実際に行われた事実は発見されず、アメリカ政府当局のなかには、無害な日系アメリカ人は収容所から外の世界に出しても良い、さ

らには日系アメリカ人による戦闘部隊を編成するという計画が浮上し、そのために行われたのが忠誠登録のアンケート調査であった。氏名、生年月日、性別などありふれた項目も多かったが、問題となる２つの項目があった。一つは日本への忠誠を拒否するかどうかを問う27番目の問い、そしてもう一つはアメリカの軍隊に従軍する意志があるかどうかを問う28番目の問いであった。

日本への忠誠拒否とアメリカの軍隊への志願をめぐってどう回答するか、その賛否を巡っては、家族間でも意見がわかれ、日系人社会全体を分断する大きな問題であった。今や日系アメリカ文学の古典的作品ともみなされるようになったJohn Okadaの*No-No Boy*はまさにこうした問題をテーマとした作品である。*Topaz*も無論この忠誠登録アンケートをめぐる話題を避けて通ることはできない。収容所に入る以前からYuki一家の知り合いであるMr. Todaは二世の若者が志願することに否定的だが、Yukiの父は肯定的であり、自分が若ければ志願するだろうと言う。Yukiの兄であるKenはずっと大学進学の夢を追ってきた青年だが、このアンケートに対して志願を決意する。Yukiの母は従軍する息子Kenの未来を心配するが、結局は父とともにKenの自主的な判断を尊重することになる。忠誠登録アンケートをめぐる問題は、Mr. Todaのような反対派の意見を紹介しながらも、物語の語り手が語る口調は、肯定派の主張を正義と見なしているように見える。

Uchidaは*Exile*の中で次のように述べている。

> My parents' Japaneseness was never nationalistic in nature. They held the Imperial family in affectionate and respectful regard, as did all Japanese of their generation. But their loyalty was always to their Christian God, not to the Emperor of Japan. And their loyalty and devotion to their adopted country was vigorous and strong. My father cherished copies of the Declaration of Independence, the Bill of Rights, and the Constitution of the United States, and on national holidays he hung with great pride in enormous American flag on our front porch, even though at the time, this country declared the first generation Japanese immigrants to be "aliens ineligible for citizenship."(*Exile*, 36)

Yukiの父が示すアメリカへの忠誠心は、Uchidaの父の忠誠心をそっくりそのまま映し出したものである。すでに見たように、Uchidaの一家は経済的に豊かであり、社会的にも、文化的にもその他あらゆる面においてアメリカ社会に馴染んでいた。したがって、Uchida一家およびSakane一家のアメリカへの忠誠心は、少なくとも彼ら自身の観点からすれば、自然なものであったのだ。

ところで、*Topaz*の主人公がYukiという少女であったことに視点を移そう。Yukiはこの物語でどう変化し、成長したのであろうか。物語が進行する過程でYukiはさまざまな経験をするが、その経験はどちらかと言えば収容者の多数が共有する経験がほとんどで、Yuki個人に特有な経験、あるいはYukiの人生に決定的な衝撃を与えるほどの経験はほとんどない。このことは、*Topaz*というこの物語がYukiという主人公を有しながらも、決してYuki個人の物語ではなく、むしろ強制収容を経験した不特定多数の日系アメリカ人全体の物語になっているからである。物語の最終場面の記述を見てみよう。

> After one long dreary year, they were back in the world again. Yuki took a deep breath. It felt good. Her spirits began to soar, and she looked at Mother and grinned. Maybe this wasn't Berkeley or San Francisco, but it was outside the barbed wire, and she'd never have to live through another dust storm.
>
> It was as though she were seeing the whole world with new eyes. The colors seemed brighter, the air seemed fresher, the sounds sharper. It was as though she had climbed out of a cocoon and suddenly discovered the sun.
>
> "Hello, world!" Yuki said brightly.
>
> It was good to be back. (*Topaz*,149)

"back"という語が繰り返し使われていることに注目しよう。すなわち、Yukiは収容所に入る前に住んでいた世界に戻ったのである。Yukiは新しい世界にたどり着いたのではなく、元の世界に戻ったのである。"new eyes"という文言を無視してはならないが、この「新たな目」が意味するものは必ずしも明らかではない。収容所の生活から脱出できたYukiの喜びは一入だが、これまでとは異なる新たな認識や考え方がYukiの心に芽生えたことを示唆するような記述は見当たらない。*Topaz*は主人公Yukiの成長を語る物語ではなく、むしろ日系アメリカ人の苦難を記述した物語なのである。

Weedflower

Cynthia Kadohataの*Weedflower*は、Kadohataが小説家としての活動のなかで初めて日系アメリカ人の強制収容というテーマに挑んだ作品である。強制収容の経験を持たない日系アメリカ人三世の作家による強制収容物語としては、すでに2002年にJulie Otsukaの*When the Emperor Was Divine*が出版されていた。Julie Otsukaの作品については、筆者はすでに別の論文で、一世や二世の人々が語った強制収容の物語に対して、語りの形式はともかく、内容

面においては、新たに付け加わるものがほとんどないことを指摘した（佐藤2021）。KadohataがWeedflowerを書く前にOtsukaの作品を読んでいたかどうかは定かではない（この作品はいくつかの文学賞を受賞するほどの高評価を得ていたので、おそらくKadohataはその存在を知っていたであろうし、読んでいたに違いない）が、いずれにしても、KadohataがOtsukaの作品から影響を受けたとは思われない。Otsukaの作品は、内容面においてはいささか陳腐であり、語りの手法においては斬新な手法を駆使したものの、十分な効力を発揮したとは言い難いからである。しかも、KadohataがWeedflowerで使った語りの手法は極めて素朴な手法であった。三人称の語り手が主人公Sumikoの物語を語るという伝統的な手法である。新鮮味のない方法だが、年少の読者を対象にした物語であることを考慮すれば、むしろ自然な選択といえるであろう。

WeedflowerはYukiとほぼ同じ年齢である11歳の主人公Sumikoを中心とした日系アメリカ人家族の物語である。Sumikoの両親は交通事故で亡くなり、家族は弟のTakao（Tak-Tak）だけである。ただし、Jiichanとおじさんとおばさん、さらにその息子たち、Sumikoにとっては従兄弟にあたるIchiroとBullが一緒に生活をしている。Sumikoにとっては彼らが家族なのであった。

物語は太平洋戦争前の時代から始まるが、冒頭のエピソードでは、太平洋戦争や強制収容よりも衝撃的な出来事がSumikoの身に起こる。SumikoはMarsha Melroseというクラスメートから誕生会の招待状を受け取る。白人の同級生の家に呼ばれたことのないSumikoは有頂天になり、家族のみんなに知らせる。誕生日の当日、Sumikoはおじさんと祖父とともにおんぼろのトラックに乗って、Marshaの家の近くまで送ってもらい、その後Marshaの家までは一人で歩き、家の玄関の扉をノックした。戸口に出たメイドはSumikoの顔を見て驚き、また、次にSumikoが顔を合わせたMarshaの母親も戸惑ったような、ぎこちない態度を示す。母親は遠回しにSumikoに向かって彼女が招かれざる客であったことを知らせる。思いがけず門前払いをくらったSumikoは恥ずかしさでいたたまれなくなり、Marshaの家から急いで遠ざかり、商店街のベンチに腰を下ろす。そして、おじさんが迎えに来てくれるまでの間ずっと屈辱に耐えながら待つのであった。

家に帰った後、Sumikoは家族の誰にも真実を打ち明けようとはせず、むしろ楽しい時を過ごしてきたかのように装うのであった。夜になってベッドに入ると、Sumikoの目には自然と涙が溢れてきた。知らぬ間にそばに来ていた従兄弟のBullがSumikoの涙を拭ってくれる。Bullは即座にすべてを察していたのだ。Bullに向かってSumikoは次のように訴える。

> She [Sumiko] cried even harder but remembered to lower her voice so Tak-Tak wouldn't hear. "Bull, they wouldn't let me come in the house! I didn't go to the party!

They made me leave!" She tried to cry silently, but it just made her snort when she inhaled. She lowered her voice even more. "But, Bull, is it just because we're Japanese?"

Bull didn't answer for so long that Sumiko thought he hadn't heard her. But then he grunted, "Yes."

"Only that?"

"Yes." Then he said, "Gaman." That meant "We must bear it." (*Weedflower*,42-43)

*Topaz*のYukiも同級生のGarvisから差別的な扱いを受けたが、Mimiのような友人がいたおかげで、Yukiの差別的な苦痛は和らげられた。しかし、Sumikoには*Weedflower*の物語全編を通して白人の親しい友達が現れることはない。人種の問題はSumikoにとって容易に解決できない問題として彼女につきまとうことになる。

ところで、*Topaz*はUchida自身が述べたように、基本的に彼女の経験に基づいて書かれた物語であり、*Topaz*以前に書かれた他の作家や作品から影響を受けたと思われるような箇所、あるいは、過去の作品に言及していると思われるような部分は見られない。一方、*Weedflower*には、読者が即座に他の作品との関係に気づく要素が存在している。ここでは、そうした問題に考察を広げてみたい。

*Weedflower*との関係で注目すべき作品は、John Okadaの*No-No Boy*である。前に言及したように、Sumikoの従兄弟はIchiroとBullであった。John Okadaの*No-No Boy*を読んだことのある読者ならば、この二人の名前を目にして、はっと驚くことだろう。それは*No-No Boy*の主人公であるIchiroとその敵対者であるBullの名前とまったく同じだからである。IchiroとBullという二人の男性名の組み合わせ、数多ある名前の中から同一の２つの名前が組み合わさって、別のもうひとつの小説に登場するというのは単なる偶然ではあるまい。そこには何らかの作者の意図があるものと推測される。しかしながら物語の先を読みすすめるうちに、読者は戸惑い、途方にくれてしまうに違いない。なぜなら、*Weedflower*に登場するIchiroとBullの関係は*No-No Boy*に登場するIchiroとBullの関係とは異なるからである。

*No-No Boy*の主人公であるIchiroは、忠誠登録アンケートの日本への忠誠を拒否する項目とアメリカの軍隊に従軍する２つの項目に「ノー」と答え、獄中生活を余儀なくされる。さらに彼は、戦後の社会に戻ってからも「ノー・ノー・ボーイ」のレッテルを貼られ、肩身の狭い思いをしなければならない。一方、Bullはアンケートに「イエス」と答えて徴兵に応じ、戦後は退役軍人として堂々と世間を歩き回っている。両者の立場は正反対であり、敵対する関係であった。一方、*Weedflower*のIchiroとBullは兄弟であり、両者の間には敵対するような関係は見られない。Sumikoにとって二人は共に優しい兄のような存在である。さらに忠誠登録アンケートに答える際には、IchiroとBullはそろって「イエス」と回答し、等しく軍隊

に入る道を選んだのであった。

*No-No Boy*という小説は太平洋戦争の強制収容に関して、アメリカ政府と日系アメリカ人という対立よりも忠誠登録をめぐる日系アメリカ人社会における内部の対立に焦点を当て、その対立と和解をテーマにした作品であった（佐藤2012）。一方、*Weedflower*では日系アメリカ人社会における内部対立がまったく描かれていないわけではないが、それは決して物語の根幹を成すほどのものとはなっていない。たとえば、日系人のなかでアメリカ当局に協力する者は当時「イヌ」と呼ばれた。物語のなかでは、「イヌ」の一人であるYamadaという人物が他の人々に打ちのめされる場面が出てくる。Sumiko自身も「イヌ」を嫌っているが、苦しそうに呻き声をあげているYamadaをSumikoはむしろ可哀相に思うのである。また、忠誠登録の場面でも、No-No Boysへの言及はあるが、彼らとIchiroやBullたちのような志願兵との間に対立が生じるようなことはない。

*Weedflower*の主題が少なくとも日系人社会の内部における対立でないことは明らかである。では、いったいこの作品の主題とは何であろうか。Sumikoが入ることになったArizona州のPostonに設置された収容所は、もともとインディアンの保護地区であった。そうした事実を踏まえてであろう、この物語の途中から、Frankというインディアンの少年が登場し、Sumikoと交流をもつことになる。*Weedflower*における人種の問題は、作品冒頭の誕生会の事件で明らかなように、極めて深刻なものである。したがって、SumikoとFrankの関係も最初はぎくしゃくしたものであった。しかし、二人はたびたび会っているうちに、農作物を育てる共通の話題を介して、また、インディアンのチームと収容所のチームとのバスケットボールの交流試合などを通じてSumikoとFrankとの間の距離はどんどん縮まり、それはやがて淡い恋愛へと発展するのであった。

忠誠登録のアンケート後、徴兵に応じた者は戦地へ行き、また、兵役の対象とならない老人や女性や子どもは収容所から外の世界に出ることが許可された。Sumikoのおばさんは収容所から出ていくことを選択したので、SumikoとTak-Takも収容所を出ていかなくてはならなくなった。Frankと別れたくないSumikoは収容所を出ていくべきか、収容所に残るべきか迷う。しかし、Sumikoと別れたくないはずのFrankは思いがけない言葉を発する。

> “How come you’re still here?”
>
> What do you mean?”
>
> “I thought you said some people were leaving.”
>
> “My aunt is going to get a job in Chicago. I don’t want to go. Auntie may let me stay.”...
>
> “...The more people who are free in the world, the better it is for Indians. It’s for

everyone. You should leave. You shouldn't live here."

"You live here."

"My future is here," he said impatiently. "Yours is somewhere else."(*Weedflower*, 245-46)

Frankがここで Sumikoの未来と自分の未来が別の場所にあると言うとき、それは単に個人のことを言っているのではない。日系人の未来とインディアンの未来が別の場所にあるのだと言っているのである。FrankはSumikoとの個人的な結合や融合を求めることなく、それぞれの民族の自由と独立を求めるのである。一方、SumikoはFrankのこうした言葉にすぐには同意せず、むしろ反発を感じるが、Jiichanが日本からアメリカへ渡ってきたときのことを想像するうちに、Frankとは別れ、収容所から出ていくことを決意するのであった。

民族の物語から個人の物語へ

これまでYoshiko Uchidaの*Topaz*とCynthia Kadohataの*Weedflower*についてそのいくつかの特徴を取り上げてきたが、ここでは両者を対比させることによってその違いを浮き彫りにしてみたいと思う。すでに言及したように、*Topaz*にはYukiという主人公はいるものの、その物語は必ずしもYuki個人の物語ではなく、収容所で暮らしたさまざまな日系アメリカ人の総体的な物語であった。したがって、Yukiの行動や発言だけに注目しても、そこから何らかのテーマの展開を見出すことはできない。

ところで、この作品が書かれた1971年は*No-No Boy*の作者John Okadaが亡くなった年である。*No-No Boy*という作品は1957年に出版されたが、Okadaが亡くなったとき、初版として印刷された1,500部の本はまだ売り切れていなかったと言われている。また、強制収容を描いた自伝作品であるMonica Soneの*Nisei Daughter*は*No-No Boy*よりも早く1953年に出版されたが、新たな序文をつけられてその新装版が出版されたのは1979年のことであり、それまではほとんど埋もれた作品として日の目を見ることはなかった。つまり、*Topaz*が出版された時点において、アメリカにおいて日系アメリカ人の存在、戦時中における日系アメリカ人の強制収容に対して関心を持つ者は極めて少数だったのである。したがって、Topazを執筆したとき、Uchidaは何よりもアメリカ人の読者に日系アメリカ人の強制収容という史実を伝えたいと願ったに違いない。そこで重要なことは主人公Yukiが抱える個人的な問題ではなく、日系アメリカ人が共通に経験した問題であった。こうした事情が、*Topaz*が主人公Yukiの物語というよりは日系アメリカ人全体の物語という様相を呈するに至った理由であろうと思われる。

一方、*Weedflower*は日系アメリカ人の強制収容を背景としながらも、主人公である

Sumiko個人の物語といった側面が強い。冒頭における同級生Marshaの誕生日に関して味わったSumikoの屈辱は、従兄弟のBullからは共感を得たものの、他の人々にはそれは秘密にされている。その屈辱を本当に知っているのはSumikoただ一人なのである。誕生会が過ぎた後のSumikoの生活の中で、たびたびこの誕生会のことが思い起こされる。同じ収容所の住人であるMr. Motoが豆の栽培の手伝いをSumikoに頼む場面では、“Sumiko's heart actually pounded, kind of like when she had gotten that birthday party invitation.” (*Weedflower,* 144)と記述される。また、インディアンのチームと収容所のチームがバスケットボールの試合をしてインディアンのチームが勝利した後、インディアンの選手と日系人の女の子が話している姿を見て、周りの人々の間で諍いが起こったとき、誕生会のときの沈黙が蘇る。

> Members of both teams had been shaking hands with each other. Now there was a silence like the silence at the party when Sumiko had walked into the living room. It rolled across the crowd in the same way. A moment ago everybody had seemed happy to have played a great game, but now both teams were glaring at each other. (*Weedflower*, 172)

そして最後は、FrankがSumikoの未来はFrankの未来とは別の場所にあると言った後である。

> Tears still fell slowly down his temple and into his hair. He wasn't crying explosively the way she had after the birthday party. So very long ago she had cried over stupid birthday party! And he was crying because his brother was dead. (*Weedflower*, 246)

FrankにはJosephという兄がいたが、Josephは軍隊に入り、おそらくは日本軍との戦いで戦死したのであった。Sumikoは人種差別を受けた悔しさから泣き叫んだのであったが、Frankはむしろ人種差別を乗り越えるべく静かに涙を流したのであった。Frankは自分がSumikoと個人的に別れることになっても、それはインディアンと日系人が将来それぞれ独立した道を歩むことにつながるのだと知っていたのであろう。

文化多元主義から多文化主義へ

*Topaz*と*Weedflower*における人種あるいは民族の問題についてはすでに幾度となく言及し

てきた。ここでは、その問題を少し整理してみよう。*Topaz*においてはYukiが同級生のGarvisから差別的な扱いを受け、白人に対して憤慨する一方、MimiやMrs. Jamiesonらの優しく思いやりのある態度によってそうした怒りは鎮められ、帳消しにされる。つまり、人種間の対立は差し引きゼロとなっている。これでは事態をあまりにも単純化しすぎているように思われるかもしれないが、*Topaz*のなかでは人種や民族の対立をこれ以上に拡大させるような記述は見られず、むしろこうした問題を封印しているように見えなくもない。Uchidaは強制収容を行ったアメリカ政府を強く非難してはいるが、人種や民族に関しては、特定の人々に非難を加えるようなことはしていないのである。

一方、*Weedflower*における人種と民族の問題はどうであろうか。Sumikoは白人のアメリカ人から物語の冒頭で、手酷い人種差別を受ける。物語の後半でインディアンのFrankと交流を重ねていくうちに少なくとも日系人とインディアンとの間には人種の垣根が存在しないかのように感じはじめる。しかし、Sumikoが収容所から出ていくことが可能になったとき、Frankは、彼女が彼とは別の道を歩むことで彼女の未来が開けるのだと諭す。*Weedflower*では異なった人種が混じり合うのではなく、それぞれが独立しながらアメリカという国が存在すべきとのメッセージが示唆されている。

ところで、ここで言葉の問題に少し触れてみたいと思う。日系アメリカ人作家の作品は、その内容が日系アメリカ人の生活や習慣に関わるものとなると、英語で書かれた文章であっても少なからず日本語が交じることになる。日本の文化や習慣のなかには、英語では説明できないものが多数存在するからである。したがって、そうした場合には、日本語をそのままアルファベットを使ってローマ字で表記せざるを得なくなる。この点に関して*Topaz*と*Weedflower*を比較すると、いささか興味深い事実が明らかとなる。両作品におけるローマ字表記の日本語の数を比べると、圧倒的に*Weedflower*の方の数が多いのである。具体的に例を挙げてみると、*Weedflower*では*kusabana, gohan, hanafuda, gaman, isoginasai, hakujin, haji, Nikkei, Sumimasen, shikata ga nai, inu*（スパイの意）などである。一方、*Topaz*ではせいぜい*bonsai*と*go*（碁）くらいしか出てこない。こうした違いをわれわれはどのように理解すべきであろうか。

Uchidaの場合、盆栽と碁は日本特有の文化である一方、ある程度それらの言葉はそのまま一般のアメリカ人にも通用する言葉である。*Topaz*には他にsamuraiという言葉も登場するが、これはさらに説明や言い換えは不要であろう。Uchidaは、基本的に日本語の使用を説明不要な最小限の日本語に留めようとしているように見受けられる。一方、Kadohataの場合には、日本人特有の精神や感情を表す言葉を多用しているのが特徴であり、しかも、必ずその言葉の後に説明的な言い換えが添えられている。一例を挙げておこう。

For instance, the previous night Mr. Moto had told Sumiko that he'd fallen on a rake as a boy. That's how he'd lost an eye. He'd said, "*Shikata ga nai.*" That meant "This cannot be helped." Once when Sumiko had asked Jiichan how sad it had made him when her mother died, he'd said, "*Shikata ga nai.*" When your house burned down, when someone you loved died, when your heart was broken, when you suffered any tragedy, but also when merely broke a toenail, that's what the Japanese said.

This cannot be helped. (*Weedflower*, 130)

Uchidaは基本的に日本の文化に特有なものは避け、アメリカの文化から逸脱しないように心がけている一方、Kadohataはアメリカ人のほとんどの読者が知らない日本語をあえて使用し、日本の文化を前面に押し出そうとしている。

アメリカでの人種や民族のあり方に関するUchidaとKadohataの姿勢の違いは、「文化多元主義（cultural pluralism）」と「多文化主義（multiculturalism）」の相違に一致するように思われる。文化多元主義と多文化主義それぞれの概念については、社会学や政治哲学など学問分野によって、また、多民族からなる国家ごとに事情は異なる。この問題について詳細を論じることは小論の目的ではないので、両者の相違について簡潔な指摘を行った末木の議論に依拠することにしよう。末木は両者の相違について以下のように述べている。

アメリカの歴史を見る時、複数の民族からなるアメリカ社会を表現する言葉は、メルティングポット、サラダボウルあるいはパッチワークなどと時代や見方によってさまざまに変化してきた。建国の経緯から考えてもアメリカ社会に複数の文化が混在することは当然のことと思われるが、その文化の多様性をどのような言葉で形容し規定するかというところに時代の特質を見ることができるとも言えるであろう。1960年代の公民権運動の時代には、民族的マイノリティ・グループが公的な権利を獲得していくとともに、私的な領域でも文化の多元性が社会に容認されるようになった。「文化多元主義」と呼ばれる思潮がこれに当り、それは国民に共通な文化の存在を前提とした上で個々のグループの文化を承認するという立場である。つまり、この文化多元主義の考え方においては、アメリカ文化は各民族的マイノリティ・グループによって等しく担われるわけではなく、複数のマイノリティ・グループの上位に国民共通の文化としてWASP (White Anglo-Saxon Protestant) の文化が想定されている。それゆえ文化多元主義は従来からのアメリカの統合理念に抵触することなく、容易に社会に受け容れられたと言えよう。一方「多文化主義」は、民族的マイノリティ・グループの独自性や自律性を主張し、その文化をWASPの文化と同等に並び立つものとした。そこ

に多くの議論を呼ぶ理由があったと思われる。（末木2013、101-102）

多文化主義に対する批判の問題はさておき、文化多元主義が複数の民族の文化が並置するその上位に国民に共通する統合的な文化の存在を認める考え方である一方、多文化主義は統合する上位の文化を想定せず、さまざまな民族の文化が併存する状況を言い表すものであるという点に両者の相違がある。Uchidaは日系の文化を決して否定するようなことはしていないが、日系人の文化に対して明らかにアメリカの文化の優位性を認めている。一方、Kadohataは白人の文化、日系人の文化、インディアンの文化の存在を等しく認めているが、それらを統合するような文化の存在を想定してはいない。時代の趨勢に影響されたこともあり、Uchidaが文化多元主義を信奉し、Kadohataが多文化主義に傾倒していることは明らかであろう。

おわりに

Uchidaが*Topaz*を書いたとき、その目的は何よりも日系アメリカ人が戦時中に受けた強制収容という不当な扱いを世間に知らしめることであった。一方、Kadohataが*Weedflower*を書いたときには、もはやそれは一義的な目的ではなく、アメリカという多様な人種、民族が寄り集まった国で、人々がどうやって生き延びていくのかが問題であったように思われる。Kadohataにとっては、アメリカにおける人種、民族のあり方を問う上で、偶々自分が属する日系人の歴史が提供してくれた素材を利用したと言っては言い過ぎだろうか。いずれにしても、KadohataはUchidaが語った物語を単に繰り返して語ったのではない。そこにJulie Otsukaの物語には見出すことのできなかった存在意義がある。

〔謝　辞〕

本研究は、JSPS科研費　JP20K00382（研究題目：日系アメリカ人三世が描く「強制収容」物語）の助成を受けたものである。

参考文献

Houston, Jeanne Wakatsuki and James Houston. *Farewell to Manzanar*. Boston: Houghton, 1973. Print.

Kadohata, Cynthia. *Weedflower*. New York: Simon & Schuster, 2006. Print.

Kato, Yukari. 'Pioneer Narrative of an Internee Girl: Cynthia Kadohata's *Weedflower* (2006) and Nikkei Reclaim for the American West.' *The Journal of the American Literature*

Society of Japan. No. 13, Feb. 2015, 61-76.

Okada, John. 1957. *No-No Boy*. Seattle: U of Washington P, 1979. Print.

Otsuka, Julie. *When the Emperor Was Divine.* New York: Knopf, 2002. Print.

Sone, Monica. 1953. *Nisei Daughter.* Seattle: U of Washington P, 1979. Print.

Uchida, Yoshiko. 1982. *Desert Exile: The Uprooting of a Japanese-American Family*. Seattle: U of Washington P, 2000. Print.

Uchida, Yoshiko. 1971. *Journey to Topaz.* Berkley: Creative Arts Book Company, 1985. Print.

Uchida, Yoshiko. 1987. *Picture Bride*. Seattle: U of Washington P,1997. Print.

ジョン・オカダ『ノー・ノー・ボーイ』中山容（訳）晶文社1979年

ジョン・オカダ『ノー・ノー・ボーイ』川井龍介（訳）旬報社2016年

ジュリー・オーツカ『天皇が神だったころ』近藤麻里子（訳）アーティストハウス2002年

ヨシコ・ウチダ『荒野に追われた人々』波多野和夫（訳）岩波書店1985年

ヨシコ・ウチダ『写真花嫁』中山庸子（訳）學藝書林1990年

ヨシコ・ウチダ『トパーズへの旅：日系少女ユキの物語』柴田寛二（訳）評論社文庫1983年

シンシア・カドハタ『草花と呼ばれた少女』代田亜香子（訳）白水社2006年

小西中和「「文化的多元論」から「多文化主義」へ―デューイのナショナリズム論の今日的意義によせて」『彦根論叢』第305号,1997: 267-287.

佐藤清人「「写真花嫁」と『写真花嫁』―事実と虚構の間で」『山形大学紀要』第15巻第２号, 2003: 123-136.

佐藤清人「太平洋戦争後の日系アメリカ人社会―ジョン・オカダの『ノー・ノー・ボーイ』」『IVY』, 第45巻, 2012: 37-54.

佐藤清人「断片的な物語―Julie Otsukaの小説―」『山形大学人文社会科学部研究年報』第18号, 2021: 75-87.

末木淳子「アメリカ自動文学にみる多文化主義：ヴァージニア・ハミルトンの作品を中心に」『京都大学学術情報リポジトリKURENAI』第16巻, 2013: 97-109.

末木淳子「ふたつの「収容所物語」-- シンシア・カドハタとヨシコ・ウチダの日系児童文学--」『京都大学学術情報リポジトリKURENAI』第18巻, 2015: 219-232.

桧原美恵「アイコンとしての日系人収容―収容体験をもたない日系人作家の描く収容物語を巡って」*AALA Journal* 14, 2009: 10-18.

ジャンヌ・ワカツキ・ヒューストン、ジェイムズ・D・ヒューストン『マンザナールよさらば：強制収容された日系少女の心の記録』権寧（訳）現代史出版会1975年

Journey to Topaz and *Weedflower*: A Comparative Study of Yoshiko Uchida and Cynthia Kadohata

Kiyoto Sato

Yoshiko Uchida's *Journey to Topaz* was a historical novel that is based on the author's personal experiences in the Topaz internment camp during the Pacific War. In 2006 Cynthia Kadohata, who was born in 1950s and has no experience of internment, published *Weedflower*. The two novels have almost the same historical settings and the central figures of the similar age, but the impressions they give to their readers are quite different. The aim of this paper is to elucidate the various contrasts between them.

The story of *Journey to Topaz* is developed around Yuki, a Japanese-American girl of 11, but nothing peculiar and serious happens to Yuki herself. What is told in the novel is not so much Yuki's personal story as the lives of Japanese American people relocated to Topaz. On the other hand, *Weedflower* describes the spiritual growth of Sumiko, the novel's heroine.

Uchida criticizes American government's racial policy on Japanese American citizens, but does not blame (white) American people. She approves American dominant culture. In *Weedflower*, Sumiko is traumatically despised and discriminated by white American people. But her trauma is healed by the existence of Frank, an Indian boy, who plays a crucial role to Sumiko and the racial problem of the story. I argue that Uchida's view of ethnicity and culture in America can be called cultural pluralism, while that of Kadohata can be called multiculturalism.